

福岡県東峰村における文化的景観と観光（第1報）

横山秀司，山下三平，日高圭一郎，内田泰三，栗田 融

1. はじめに

田植えが済んだ棚田の景観，きれいに整えられた屋敷林や防風林が見られる農村の景観，紅葉した里山を背景としてかやぶき屋根の家が建ち並ぶ景観，伝統的な町並が残る街道の景観など，日常的に見られてきたこのような景観は，これまでその価値が評価されることは少なかった。しかしながらこのような景観が失われつつある今日，わが国の風土，伝統，生業に根ざした文化的景観としての価値が認識されるようになってきた。

このような流れに即して，文化庁は2004年4月に「文化財保護法」の一部を改正し，文化財保護の体系の中に新たに「文化的景観」を設けた。その中で特に重要で保護の処置が講じられているものについては，都道府県または市町村の申出に基づき，「重要文化的景観」として選定することになっている。九州では大分県日田市皿山の「小鹿田焼の里」，佐賀県唐津市の「蕨野の棚田」など9地区が選定されている（2011年9月現在）。

さて，筆者らはこれまで「景観」をキーワードとして共同研究を行ってきた。今回，小石原焼きの窯元が立ち並ぶ小石原地区，日本の棚田百選に選定されている竹・岩屋地区をもつ福岡県朝倉郡東峰村を研究対象地域として（図1），地理学，景観生態学，生態学，建築学，景観工学，デザイン工学の観点から文化的景観の評価ならびにそれを背景とした地域・観光振興の可能性に関して研究をすることとした。平成22年度より現地での観察，地元

住民や窯元，役場関係者などからヒヤリング調査を進めている。本研究は平成22・23年の継続研究であるので，第1報として，地域の概要と文化的景観の現状について報告する。

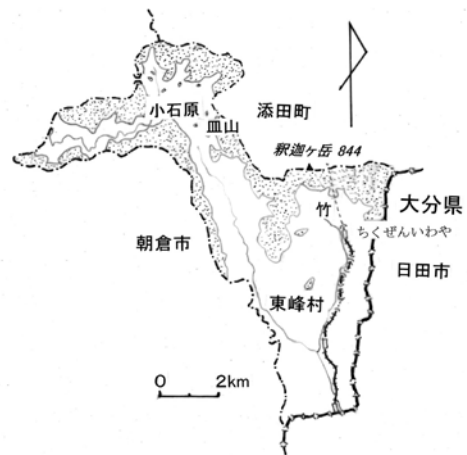


図1 東峰村の概要
（点で示した範囲は標高500m以上）

2. 地域の概要

2-1. 自然的背景

<小石原地区>

英彦山から西へ連なる尾根は，日本海側に注ぐ遠賀川水系と太平洋側に注ぐ筑後川水系の分水嶺をなしている。遠賀川を遡って標高500mの嘉麻峠を越えるとやや平坦な小石原盆地となる。標高460～470mのこの盆地は嘉麻峠から南の大肥川沿いに延びる桑野一大行司断層線の西側が隆起し，東側が沈降した結果によって形成されたものである。すなわち

小石原川の上流部の沈降によって谷が埋設されて盆地状になったのであり、図2の稗畑、奥畑、原集落周辺の水田は、その盆地上に形成されている。一方、断層線より下流側の小石原川は山地の隆起により、下方侵食が大きくなって、先行谷の形状をなしている。



図2 小石原地区の概要
(1:50000 「吉井」)

桑野-大行司断層を境に地質構造も大きく異なる。西側は主に古生代の変成岩や白亜紀の花崗岩よりなり、東側は主に中新世後期から鮮新世前期の火山岩からなる。この火山岩は長い間に侵食され、大日岳から英彦山にかけては、鋭い尾根を形成していることによって、奈良時代から英彦山への修験道の峰入りの道となっている。

またこの断層の東側約500mには、平行して岩崎断層が走る。盆地内の稗畑から皿山に延び、大行司火山岩類は断層運動により破碎帯が形成されている。破碎帯は侵食されやすいので、盆地内の細分化された小さな凸部と埋積谷を作ったと考えられる。これら2つの断層運動によって生じた破碎帯が小石原焼の陶石の形成に関与していると考えられている

(平野他1992)。

皿山地区を流れる大肥川は桑野-大行司断層の存在によって断層谷となった。侵食力を増した上流部の支流の一つである皿山川は、小石原川の上流部を奪い取った。これはいわゆる河川争奪であり、古窯跡近くの無料休憩所付近が争奪の肘にあたり、かつて北に流れていた小石原川はここで90度向きを西に向けてやや急な皿山川の流れとなり、大肥川に合流する。この西流する皿山川の水流を使用して、かつて唐臼が20基設けられていた。

盆地周辺は標高600m~700mの尾根が連なる。山腹斜面の多くはスギ・ヒノキ植林地であるが、火山岩地の尾根部にはクヌギ・コナラ林が広がっている。また、行者堂周辺には樹齢300~600年の行者杉と称す植林地がある。これは、修験者が峰入りの際に杉の苗を植えたことによって成立した林である。大王杉と呼ばれる樹齢約600年の杉のような大木が多く存在していたが、2003年の台風により多くの古木が倒木の被害にあった。これらの森林は、水源涵養と皿山地区の窯業に必要な燃料の一部であったと考えられている(『小石原村誌』200~203頁)。

<竹・岩屋地区>

竹・岩屋地区は、大行司付近で大肥川に合流する宝珠山川の上流部に位置する(図3)。宝珠山川は英彦山から続く釈迦ヶ岳(844m)と大日ヶ岳(829m)を結ぶ稜線を分水嶺としている。その南斜面の標高300~360m付近の緩斜面に竹地区は位置する。また岩屋地区は、宝珠山川の右岸、屏風岩、天狗岩など奇岩がそそり立つ標高400m~500m付近に位置する。



図3 竹・岩屋地区の概要
(1:25000「英彦山」による)

岳・岩屋地区は大日岳火山の火砕流堆積物が固結した凝灰角礫岩や凝灰岩である。凝灰岩は、侵食に対する抵抗力が弱くて侵食されやすいので、大小の角礫を包含した角礫凝灰岩が残って奇岩を呈すようになったのである。

岳の棚田地区は、岳集落のすぐ北をほぼ東西に走る断層があり、断層の南側が沈降したことによって緩斜面が形成されたと考えられる。この緩斜面上に堆積していた岩石・礫を利用して棚田の石垣としたのであろう。

斜面の安定した山腹ではスギ・ヒノキの植林地が広がっている。屏風岩や岩屋付近では夏緑広葉樹林となっている。

2-2. 人文的背景

東峰村は2006年に小石原村と宝珠山村が合併して東峰村となった。1960年の総人口（2村合計）は6352人、1990年には3371人に減少し、2010年には2433人まで減少している。福岡県では最も人口の少ない村（行政単位）であり、また、2010年の統計では県内第1の高齢化率（36.5%）となっている。産業

別就業者の割合は、第1次産業が18.3%、第2次産業が35.9%、第3次産業が45.8%である。小石原焼の産地であることから、周辺町村に比して第2次産業就業者の割合が高い。

耕地面積は村域の5.9%にすぎず、そのうち水田が77.9%、畑が22.1%である。耕地は主に小石原盆地と大把川および宝珠山川沿いに分布し、多くは山林となっている。2010年の農家総数は345戸であるが、販売農家数は約半数の169戸であり、2000年以降減少の一途を辿っている。農家の約半数は自給的農家であり、専業農家は14戸、農家の4%にすぎない。

<小石原地区>

中世における小石原は、英彦山修験道の峰入りルートの一つとしての機能をもっていた。1595年に役行者木造を献納した行者堂や護摩壇が皿山地区の北に保存されており、また周囲は修験者が植えたとされている杉の大木があり、その歴史を知ることができる。

さて、小石原は約300年以上の歴史をもつ焼き物の発祥の地であり、現在では約50軒の窯元が域内で活動をしている。

『小石原やきものの歩み』（2001）によれば、小石原には高取焼と小石原焼の2つの流れがある。高取焼は文禄元年（1592）に黒田長政が豊臣秀吉の命により朝鮮に出兵した折に出会った陶工八山を日本に連れ帰り、高取山（直方市）の麓に窯を開かせたのが始まりである。八山はこの地にちなんで姓を高取、名を八蔵と改めた。その後、白旗山（飯塚市）に窯を移した後、寛文5年（1665）に鼓村釜床（旧小石原村）に引っ越してきたとされている。

一方の小石原焼は、八蔵の孫の八之丞が、中野（現在の皿山地区）で陶石と釉薬を見つけたて移り住み、磁器の生産を伊万里から来た陶工と共に天和2年（1682）に小石原の土で行ったのが中野（小石原）焼の始まりとしている。しかし、小石原の土が磁器生産に向

かなかったので、高取焼にならって陶器生産に移っていくのである。

1901年（明治34年）の統計資料によると、窯元数は10戸、共同登り窯2基、職工数は10人であった。村落共同体を基盤とした共同体的生産構造もっていた小石原焼は、家内手工業的生産形態を長く維持してきた。小石原焼の大きな転機は、第2次世界大戦後から始まった。敗戦後の物資不足から瓶類などの荒物の需要が拡大した。本格的発展は、1948年（昭和23年）に九州民芸協会が設立されるなど、九州における民芸運動が活発化して、小石原焼が広く民芸陶器として消費者に受け入れられるようになった後からである。

1960年代に入ると、小石原焼は空前の活況を呈し、窯元数はこの10年間に15戸増加した。さらに1983年代には市場は拡大し、生産のピークを迎え、窯元数は50戸に増大した（『小石原村誌』pp.150～154）。現在、約50の窯元は、小石原焼発祥の地とされる皿山地区と1970年代から新たに開業した窯元が立ち並ぶ国道211号線沿い、さらには大把川を下った鼓地区にある。1999年には旧小石原役場に隣接して道の駅「小石原」が開業し、小石原焼の販売コーナーが設けられた。

＜竹・岩屋地区＞

この地区にとって重要なのは、531年に中国の北魏の仏教僧・善正法師が彦山に入り修行を始めたが、533年に宝珠山に來訪して岩屋社を開基したという歴史である。また、547年には隕石が岩屋に落ちてきた。それを宝珠石とし、岩屋神社に奉納して現在に至っている（『宝珠山村誌』pp.50～51）。岩屋神域内は、火砕流堆積物が固結した凝灰角礫岩や凝灰岩が奇岩や窟を呈しており、それらを背景に岩屋神社本殿の他、熊野神社、琴平宮、大日社、猿田彦、天満宮、奥の院などがあり、修験道の修行の地という雰囲気をも今に伝えている（写真1）。

竹・岩屋地区の集落発生の歴史は定かでは

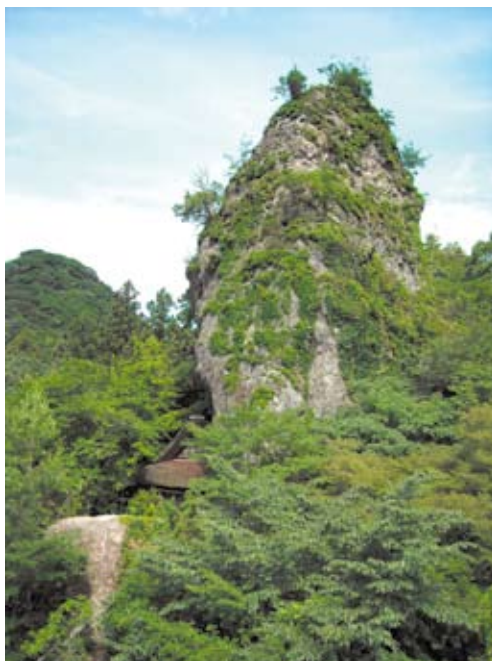


写真1 屏風岩と岩屋神社

ないが、この地区での生活者は岩屋社などで窟修行に励んだ僧侶であり、8世紀末からは岩屋本殿での修行が始まっている。宝珠山窟などの寺社を維持するためには、多くの人材や資金が必要であり、稲作も行われていた。農民からの徴税責任者は「名主」であるが、彦山神領では「専当・センドウ・（仙道）（仙頭）」とよばれていたという。竹地区には、小字名として仙道、川の名称として仙道川が見えることから、竹地区は彦山神領として成立したことが明らかである。

さて、竹地区の人口は、2001年の141人から毎年減少し、2011年には116人となった。65才以上の高齢者人口の割合は、2001年の36.1%から大きな変化は無く、2010年は35.0%であり、村の平均35.6%（2010年）より若干低い値となっている。岩屋地区は、2001年の152人から130人に減少しており、高齢者率は38.2%（2010）と竹地区より高い値となっている。標高320～370mの棚田をもつ岳地区は、1995年には30戸の農家（うち

販売農家24戸）があったが、2005年には22戸（同16戸）に減少している。経営耕地面積も1995年の14haから2005年には11haに減少している。岩屋地区は総農家数29戸、販売農家数は18戸、耕地面積は8haであり、すべて水田である。

3. 文化的景観の現状

3-1 小石原焼の里・皿山地区

小石原焼発祥の地・皿山地区は、道の駅「小石原」から東へ徒歩10分ほどの所に位置する。陶器に適した地質の存在、陶石を粉砕する唐臼の動力となる水源、登り窯の燃料となる薪の存在などを基盤に、300年以上にわたって9軒の窯元による共同体的陶業がなされてきた。図4は1955年当時の皿山地区の窯元の分布と唐臼、共同窯の位置を示したものである。大把川の深い谷沿いに唐臼が連続的に設置されている様子、共同窯が集落の中に上窯と下窯があったこと、また陶石を採取する採土場の位置が読み取れる。なお、採土場付近は1998年に小石原焼伝統産業会館が建築された。

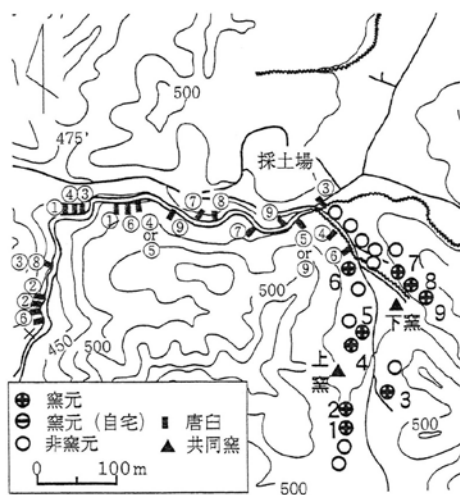


図4 1955年当時の皿山地区の窯元、唐臼、共同窯の分布（濱田 1998）

しかし、1950年代半ばから小石原の陶業は伝統的形態から近代化・現代化への過程へと進む。電気ロクロやガス窯が導入されたことにより、窯元が自由に開窯できる状況が生まれ出された（濱田 1998）。それにより、皿山地区の窯元は15に増大し、国道211号線沿いにも次々と新しい窯元が店舗を開くようになった。その後、1992年には共同陶土工場が完成することなどもあり、皿山川の水流を使用した唐臼は放棄されていった。

このような生産過程の変化によって皿山地区の景観はどのように変化したのであろうか。

かつては唐臼のたたく音が響いていたと思われるが、1基だけが皿山地区に遺産として残されているにすぎず（写真2）、それも現在は全く動いていない。観光資源となる唐臼



写真2 皿山地区に残る唐臼



写真3 皿山地区の窯元

であるので、日中だけでも、動かすという演出がほしい。

伝統・文化的に価値がある茅葺き屋根をもつ窯元の家屋は4軒(写真3)であり、他の多くは日本瓦の和風建物となっている。茅葺き屋根を維持していくには、経済的負担が大きいが、行政的支援によって維持していきたい。

地区の道路は敷石で修景がなされており、各窯元の前庭は小ぎれいに整えられているところがあるが、プレハブ造りの倉庫等が道路に面しているのは、若干問題がある。

多くの窯元は、電気・ガス窯を備えており、通常は登り窯を使用することはほとんどなくなり、窯から煙が立ち上るといった光景は見られなくなった。

集落周辺はスギ植林地とクヌギ・コナラの二次林となっている。杉林の林床にはシャクナゲが、駐車場周辺にはアジサイ、また集落東側の尾根筋にはツツジが地元民によって植えられなど、景観に配慮した植栽が行われている。

3-2 棚田百選の竹地区

日田彦山線の「ちくぜんいわや」駅から北東に宝珠山川を遡った標高250~400m付近の緩斜面に、約400枚の棚田面がある。詳細にみれば、宝珠山川沿いの他、東の支流の仙道川と日向志川の谷沿いに棚田が分布している。

棚田は一般的に、東日本では土坡(土によって斜面を固めたもの)が多いのに対し、西日本では石積み棚田が多い。竹の棚田も凝灰角礫岩を利用して石垣を形成している。

また、棚田を所有する農家は、棚田の下方にまとまって集村形態をとるのではなく、2~3戸の農家がまとまって斜面に立地しているのが、他の棚田地域には見られない竹の特徴をなしている(写真4)。また、母屋の多くは日本瓦の和風建築となっているが、棚田交流館から北に見える寄せ棟造りの農家の母



写真4 竹の棚田地区

屋は、宝珠山地区で最も古い家屋であり、茅葺き屋根はトタンに覆われてはいるが、この地域の伝統的な建築様式を留めている(写真5)。同様の様式をもつ家屋は他に7軒ほど残存している。



写真5 竹地区で最も古い民家

現在、竹地区の棚田はすべてが水田として利用されてはいない。農家の兼業化などによって転作・放棄水田がみられるが、理由はそれだけではない。戦前から大行司周辺に立地していた炭坑の石炭を北九州方面へ運搬するために、1937年に釈迦岳トンネルの掘削が開始された。しかし、竹の北を東西に走る断層破碎帯を突き進んだことにより、トンネル内に出水が生じた。これによって仙道川と日向志川の源流部の水脈が断たれ、用水の確保ができなくなってしまった。住民の生

活用水も潤れ、水田は畑へと転換せざるを得なくなり、ラミー（多年生の繊維植物）の栽培などが行われた。その後、トンネル内の湧水をポンプで集落の上方の貯水池まで揚水されるようになった。また、溜め池が建設され、用水路の整備が進むなどして水田が回復したが、一部は畑地のままで現在に至っているのである。

現在、棚田は地元民によって良く手入れがなされている。年2回、棚田の石垣に生える雑草取りが行われている。かなり大変な労働であるというが、この作業は棚田斜面の崩壊を防ぐだけではなく、石垣を美しく見せるためでもある。一部の石垣には茶の木を植えているが、茶の飲用という実用面と景観美を兼ね備えたものである（写真6）。



写真6 きれいに手入れがなされた棚田。一部に茶が植えられている。

このような住民の取組もあり、1999年7月に農水省は、竹の棚田を「日本の棚田100選」に認定した。それを受けて、住民は「棚田景観保存委員会」を結成し、保存・整備活動だけではなく、都市との交流を図るために、田植えと稲刈りなどの農業体験を募集して、実施している。これは主として福岡市や北九州市などの都市住民を対象としたもので、大人2000円、子供1000円の参加費を徴収している。参加者には、棚田交流館でおにぎりや猪鍋や飲み物がふるまわれ、春はジャガイモ、秋はサツマイモがお土産として出される。なお、2009年の田植えの参加者は、福

岡市28名、北九州市13名など合計80名であった。

棚田の北側は、釈迦岳や大日岳の山々が連なり、棚田の後景としての役割を果たしている。大日岳から南に延びる尾根の一部が岩屋の奇岩類となっているが、ここには岩屋神社を始め多数の文化・歴史資源が存在するので、棚田地区と一体をなす文化的景観としての価値が大きい。

4. 小括

これまで、東峰村の小石原焼の里・皿山地区および宝珠山・竹の棚田地区の概要と文化的景観の要素に関して述べてきた。前者は窯業という伝統的な生業、後者は棚田による農業などの文化的景観をなし、そしてどちらも後景として修験道に関する文化遺産をもっている。また、両地区以外にも、東峰村には活かすべき自然的・文化的景観要素が内在している。

第2報では、これら他地域の景観資源の存在を含めつつ、皿山地区と竹地区の文化的景観の評価、景観と地元民との関わり、景観を活かした地域振興、観光客誘致、などに関して考察をしたい。

（本研究は共同研究であるが、第1報は横山が執筆した。したがって、文責は横山にある）

<参考文献>

- 小石原（2001）：『小石原村誌』，403頁。
- 小石原焼陶器協同組合（2001）：『小石原やきもの歩み』，50頁。
- 濱田琢司（1998）：産地変容と「伝統」の自覚—福岡県小石原陶業と民芸運動との接触を事例に一。人文地理，第50巻第6号，pp.78-93。
- 英彦山団研グループ（1992）：九州北部の新第三紀構造形成史—英彦山およびその西方地域—。地学雑誌，第89巻第7号，pp.571-586。
- 平野国臣，百合野俊彦，甲斐治夫（1992）：福岡県

横山秀司, 山下三平, 日高圭一郎, 内田泰三, 栗田 融

小石原周辺の地質について—陶石の成因を中心に
して—。日本地質学会学術大会講演要旨, 99号,
pp.318。
宝珠山村誌刊行委員会 (2010) : 『宝珠山村誌』 680頁。